

## 学校推薦型選抜入試における「女性枠」設定の思い



巻頭言

関山 明\*

Thoughts on Establishing a “Women’s Quota” in Examinations for Admission  
by High-School Recommendation for School of Engineering Science

Key Words: Women’s Quota, Equality, Equity, Admission, Learning Environment

2026年度入学者から基礎工学部では学校推薦型選抜入試に「女性枠」を設けます。これには色々なお考えがあるかと存じます。本稿では、限られた紙面のなかで、「公平性」を考慮してもなお基礎工学部で女性枠を設定すべしという結論になぜ至ったのかについて、記録としても残しておきたいと思います。

少なくともこの10年間、基礎工学部は女子学生が増えるべく努力し教員も相応の負担・協力を続けています。しかし、女子学生の割合は約1割にとどまり学科によっては「強制ボッチ状態」になりうる状況が依然改善されないことが女性枠設定の一番の動機です。

一方、女性枠への反対理由としてまず挙げられるのが「入試の公平性(Equality)が損なわれる」という意見です。これについては、どんな形かでも女性枠を設定する以上、女性枠が公平性を全く損なわないとは言いきれません。しかし、時代や世界が変化するなかで視点を変えると、他の公平性や教育成果・国際的評価や評判の全てを犠牲にしても現在の入試の公平性を死守すべきか?という別の問いが生まれます。SNS等では入口の議論に終始し、この問いが発せられることは殆どないようですが・・・

コロナ禍を経て、学部教育における対面の重要性が再認識されていると理解します。理工系ですと実験・実習があるから対面必須という考えもありますが、それにとどまらず「良いコンテンツを開発・用意できれば講義は(学生がきちんと勉強するなら)全部オンラインで良い」とは考えない教員・学生が殆どかと存じます。それは「共に同じ専門分野を学ぶ同期学生の存在」を根本的に無視しているからです。同期学生と切磋琢磨する、それには学びの内容が難しく挫けそうな時に友人と言える同期学生と教え合い・時に愚痴をお互いこぼしながら励まし合って学びを継続することも含みますし、大学時代の友人はその後の人生でも重要になりうるとのことですが、そういう同期学生友人のいる修学環境が学部の対面教育で大きな意義を持ちます。

では、基礎工学部の現在および過去の修学環境は性別問わず公平か?という結果として全くそうではありません。大多数の男子学生とは異なり圧倒的少数の女子学生には同じ学科内で同性の友人を選ぶ権利もなければソリの合わない同性学生を遠ざけて過ごすことも事実上難しい。同性の学生には困難なく弱音や愚痴をこぼせても異性の学生にそうしづらいことは想像に難くありません。「テスト勉強を一緒にしよう」と言っても同性間と異性間で全くの同一ニュアンスで受け取られる保証もありません。男子学生には気軽にできる環境が女子学生には全く用意できていないこれらの状況は入学後の修学環境に性差由来の著しい不公平(Inequity)が存在することを意味します。厄介なのは、この不公平な修学環境は、自然発生的に生じた結果であり誰にも直接的責任がないことです。ただ、女子学生が半数とは言わずとも一定以上の割合になればこの不公平は自然と解消に向かいます。



\* Akira SEKIYAMA

1970年1月生まれ  
東京大学大学院理学系研究科物理学専攻  
博士課程修了(1997)  
現在、大阪大学大学院基礎工学研究科教授(物質創成専攻 物性物理学領域)・研究科長/学部長 博士(理学)  
専門/物性物理学(実験)・固体量子物性・放射光科学  
TEL: 06-6850-6420  
E-mail: sekiyama.akira.es@osaka-u.ac.jp

結局のところ、私個人としては、入試の公平性 (Equality) と入学後の対面修学環境における公平性 (Equity) が基礎工学部では結果として両立していない、とコロナ禍を経て気付かされました。本来、教育機関としての大学にとって入学後の教育が最も重要かつその修学環境に責任を有するはずですが、これまで大学関係者含め日本社会全体がその環境を著しく軽視してきたと思わざるを得ません。誰の責任でもない結果だから放置、というのも今時の教育組織として無責任でしょう。社会全体が変わらないと、と言うのならそのきっかけを女性枠設定の形で作ることが今の大阪大学基礎工学部のなすべきことと考えています。

基礎工学部は20年以上前の2002年から現在の学校推薦型選抜入試を実施しています。幸いなことに出願者数は定員を遥かに超え、現在は入学定員の1割程度45名が推薦入試で合格して入学しますが、入

学後の修学状況は一般入試合格者と全く遜色ありません。つまり、基礎工の推薦入試は学力考査としても十分機能しています。今回の女性枠は、この学校推薦型選抜の定員を女性枠20名だけ増やし、かつ大学入学共通テストが最重要な第一次選考ではこれまで通り性別関係なく選抜するように設定しました。よって、女性枠設定後でも学力は担保されることが十分期待できます。

理工系のジェンダー構成が今のままでは、他のアジア・中東諸国と比較しても日本が理工系後進国扱いされてしまう可能性が今後あるかもしれません。そして、それを理由に将来日本では国際会議が開催できず(選ばれず)、ジェンダーバランスの点で優れた他のアジア諸国で頻繁に開催される事態になるかもしれません。そうはならないよう、大阪大学で女子学生割合が最下位の基礎工学部に言う資格はないのかもしれませんが、微力を尽くせたらと思います。

